



羅針盤

安部 正敏

Masatoshi Abe

医療法人社団 廣仁会 札幌皮膚科クリニック 副院長、褥瘡・創傷治療研究所、
Visual Dermatology 編集協力者



愛護的皮膚科診療

看護学には“愛護的”との表現がある。“愛護的ケア”などと用いられるが、軟膏を愛護的に塗布するなど、医療現場のケアには誠にもってこいの用語である。ただし、ともすればファジーな印象を受ける言葉であるのも事実であり、医師は当然患者の苦悩となる疾患を治療に導く責務があるが故、愛護だけでは終わらないと考える向きもあるかもしれない。

しかし、われわれの仕事にも転換期が訪れている。皮膚科学に限らず、医療現場にも確実に人工知能 (artificial intelligence : AI) の波が押し寄せてくる。将来、ロボットの前に皮膚疾患に悩む患者が座れば瞬時にして正確な診断が下されるかもしれず、筆者の如きヤブ医者も確実に淘汰される時代がやってくる(その為、他誌でせつせと鉄道エッセイを認める有様である)。次に軟膏を塗るロボット。背部にも適量を正確に塗布するであろう。会計ロボットは、複雑な保険制度も何のその、瞬時に正しく会計し、電子マネーで清算するかもしれぬ。しかし、生身の体は小宇宙の如き複雑さである。治らなかった際の再診において、患者の訴えにロボットはどう対処するのだろうか？

ところで、巷には自動音声が増えている。自動販売機の“ありがとうございます”という機械音声に、“機械にお礼を言われる違和感を覚える”という意見も、いつしか少数派となった。今では“ご乗車ありがとうございます”という電車の自動放送も当たり前。タクシーに乗るとシートベルトの注意だけが自動音声であり、人間が言いたくないことは機械任せということか。

しかし、自動音声で誰もが違和感を覚えるのはお詫び、

そして思いやりの言葉ではなかろうか。軟膏を塗ったが治らぬという患者を前に“申し訳ありません”とか“症状がひどいようです”などと機械が言うなど、患者が態度を硬直化させること請け合いです。患者は医師の“では塗り方をもう一度おさらいしましょう！”という言葉に自らのアドヒアランスの悪さに気づき、“この量を塗り広げましょう”という看護師の優しい言葉に安堵し、“お大事になさってくださいね”という受付嬢の言葉に喜び、“お薬しっかり塗りましょうね”の薬剤師に勇気づけられる……という安っぽいドラマのごとくには現実はいかないのかもしれないが、医療は多職種の雅量に富む心が重要なのであろう。機械に哀憫の情は不可能だ。

近年の皮膚科学の進歩には目を見張るものがあり、クリニック勤務の筆者はついていくのも容易なことではない。しかし、それぞれの研究は確実に臨床現場、つまり患者に還元されている。これは皮膚科のみならず、皮膚科を取巻く学問体系である看護学、薬学、栄養学、工学などにおいても同様であり、とくに創傷治療やスキンケアの分野では、多方向から国際的評価に十分耐えうる優れた研究と臨床知見が集積され、新たな展開を迎えている。本特集では、そのエッセンスに短時間で容易に触れて頂くことで、明日からの診療に必ず役立つものと自負している。

愛護という言葉には“その良さを損わずに保護すること”という意味がある。まさに外用療法に通ずる言葉である。学際領域の優れた知見を愛護的に学ぶことも、また皮膚科学を発展させる一助となるに違いない。